

## 教育・保育現場におけるリスクマネジメント —リスクに対する認識を中心に—

松田広則（児童学科・准教授）

田爪宏二（子ども心理学科・准教授）

鈴木 樹（教育学科・准教授）

伊東 潔（セコム（株）IS研究所）

高城義太郎（鎌倉女子大学）

### I. 研究の背景

2001年に発生した大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件以後、学校への不審者侵入や子どもが被害者となる誘拐・殺人事件が頻発しており、教育・保育現場において外部からの不審者侵入の対策が講じられてきた。また、2006年に滋賀県長浜市において発生した友人の母親による2園児刺殺事件の例などのように、母親や同級生が加害者となる事件など、その内容も複雑、多様化してきている。このような社会状況のなか、教育・保育関係者や保護者の間で安全・安心に対する要求が高まっている。

また、交通事故、家庭内の事故、遊具や遊びに伴う事故（ブランコ、回転ドア、水辺事故など）、理科・図工・家庭・体育などの教科における事故など、子どもの活動に伴う事故が頻発しており、この問題に対しても対策が望まれる。これらの背景のもと、2006年3月には学習指導要領に安全教育を盛り込むように指示されている。また、厚生労働省においても21世紀の母子保健のビジョンを示すための「健やか親子21」推進協議会を設置し、子どもの事故防止に関する具体的な取り組みとして、「事故の大部分は予防可能である。子どもの発達段階に応じた具体的な事故防止方法に関して、家庭や施設関係者への情報提供、学習機会の提供等を行う」ことを掲げおり、子どもの事故防止が国民的な運動として展開されることが期待されている。これらの取り組みからもわかるように、安全教育は教育・保育における重要な課題である。

一般的に、子どもを取り巻く安全には、自分を取り巻いている環境を安全に保つための安全管理（リスク・マネジメント）と自分自身が危険を回避し安全な行動がとれるようにするための安全教育の2つの側面が考えられる。安全教育に関しては安全学習と安全指導があり、小学校教育の中では主として保健体育科（保健分野）で安全学習が行なわれ、特別活動（学級活動、健康安全・体育的行事）を中心に安全指導が行なわれている。同様に幼稚園、保育所における保育においても、事故を未然に防ぐために適切な配慮や対処をする安全管理と、子どもに対して安全な生活に必要な基本的習慣や態度を養う安全教育、指導が保育者等により行なわれている。

### II. 研究目的

近年、子どもをめぐる社会環境、とくに安全に関わる様相が大きく変化してきている。現代において、あらゆる生活圏での子どもの安全性を高めるためには、子どもとの関わり

の深い教師や保育者、親が危険を認識することや危険の対処法をより適切に考えることが必要となる。前述のように、これらの考え方にはおもに安全管理と安全教育という概念があり、子どもの安全対策としては両者ともに必要である。荻須（2004）は、遊び場にある固定遊具等の親を中心とした安全点検活動の実態や課題について報告している。また、学校敷地内での危険な場所の点検（鈴木：2006）や、運動部の事故防止のための事故事例の検証（野間口：2006）、そして家田ら（2008）による幼稚園と保育園の保護者を対象とした「ひやりはっと」体験の報告などがある。このように安全管理や安全教育に関する従来の研究においては、安全な生活環境を子どもに提供する、または大人が子どもの安全を管理、教育するというように、子どもを取りまく環境や大人の援助のあり方について検討されたものが多い。しかしながら他方、主体である子どもの安全に対する認識、子どものもつ危機回避能力、緊急時における子どもの認知、行動の特徴については十分な検討がなされていない。

このような問題点を踏まえ、本研究は子どもの安全対策の現状、および安全対策に関わる大人（親・保育者・教師）と子どものそれぞれの認識について調査し、より効果的な安全管理や安全教育を行なうための資料を得ることを目的とする。なお、本研究は、子どもの運動学的視点、および環境認知に関する心理学的視点からのアプローチにより、この問題に対する知見を得るための基礎研究であり、このような研究を通して子どもの姿を明らかにしていくことは、より子どもの視点に立った環境構成や安全教育を行なう上での示唆となりうるものであると考えられる。大人と子どもの認識差を理解するための基礎的資料として、子どもの遊びのなかにおいて、大人が認識していない遊び方や危険と感じる遊び方についての調査結果を報告する。さらに、遊びの現場、もしくは日常の遊びに関する保護者と学生の安全性の認識の差異について報告する。

### Ⅲ. 調査1：保育においてみられる子どもの「危ない遊具の使用」

#### 1. 質問紙調査の概要

保育現場において、子どもが遊具で遊ぶ際にみられる、大人が予想しない遊び方や、危ないと思われる遊びについて、幼稚園または保育所において実習を行った学生を対象に質問紙による調査を行った。対象は、保育者を志望する短期大学生65名であり、調査は保育士資格に関連する講義の中で実施した。

#### 2. 結果と考察

##### 1) 危ないと思われる遊び方の頻度（Table 1）

子どもの遊具の使い方、遊び方において、事故につながる要因になると考えられる行動を、「異なった使用法」、「高い、不安定な所での遊び」、「子ども同士の接触」、「無理な遊び方」のカテゴリーに分け、Table 1に示す項目について、保育現場においてどの程度見かけたことがあるかを、「良くあった／時々あった／あまり無かった／全く無かった」の4件法で質問し、回答を求めた。その結果、「良くあった・時々あった」とする回答が60%を超え、高い頻度で観察された子どもの行動は、「通常とは異なる遊具の使い方をする（66.2%）」、「自分の身長よりも高いところに上る（83.1%）」、「自分の身長よりも高いところから飛び降りる（63.1%）」、「遊具の中で他の子どもにぶつかる（73.8%）」、「遊具の中

で他の子どもを押してしまう（75.4%）」であり、高い場所、不安定な場所での遊びや、子ども同士の接触が多く見られていることが伺われた。

Table 1 危ないと思われる遊び方の頻度（括弧内は有効回答数に対する割合（%））

遊び方		良く あった	時々 あった	あまり 無かった	全く 無かった	計 (有効回答数)
異なった使用 法	正しい使い方を理解せずに遊具で遊ぶ	2 (3.1)	10 (15.4)	48 (73.8)	5 (7.7)	65 (100.0)
	通常とは異なる遊具の使い方をする	6 (9.23)	37 (56.9)	18 (27.7)	4 (6.2)	65 (100.0)
高い、不安定な 所での遊び	自分の身長よりも高いところに上る	24 (36.9)	30 (46.2)	8 (12.3)	3 (4.6)	65 (100.0)
	自分の身長よりも高いところから飛び降りる	17 (26.2)	24 (36.9)	15 (23.1)	9 (13.8)	65 (100.0)
	ボールやタイヤなどの上に乗る	11 (16.9)	22 (33.8)	22 (33.8)	10 (15.4)	65 (100.0)
	大型積み木や机などを積み重ねて上に上る	14 (21.9)	20 (31.3)	18 (28.1)	12 (18.8)	64 (100.0)
子ども同士の 接触	遊具の中で他の子どもにぶつかる	12 (18.5)	36 (55.4)	13 (20.0)	4 (6.2)	65 (100.0)
	遊具の中で他の子どもを押してしまう	15 (23.1)	34 (52.3)	15 (23.1)	1 (1.5)	65 (100.0)
無理な 遊び方	自分の年齢よりも低い学年用の遊具で遊ぶ	6 (9.2)	27 (41.5)	25 (38.5)	7 (10.8)	65 (100.0)
	自分の年齢よりも高い学年用の遊具で遊ぶ	3 (4.7)	30 (46.9)	23 (35.9)	8 (12.5)	64 (100.0)
	遊具に力を加えすぎる	4 (6.2)	21 (32.3)	31 (47.7)	9 (13.8)	65 (100.0)
	遊具の定員をオーバーして使っている	6 (9.2)	26 (40.0)	22 (33.8)	11 (16.9)	65 (100.0)

## 2) 危ないと思われる遊びの種類（Table 2, 3）

保育において見かけた子どもの遊びの中で、遊具の使い方で危なかった（または危ないと思った）ことや、予想とは異なる遊具の使い方をしていたことについて、自由記述で回答を求めた。その結果、ジャングルジムやすべり台、雲梯など、屋外の大型遊具を中心に意見が挙げられており、特に、高い場所や不安定な場に登ったり、飛び降りたりする行動が、危険であると捉えられている。自分の身長よりも高い所に登り、飛び降りる行動は、子どもの運動遊びの中でもスリルを楽しむことができるものであるが、転落したり、着地に失敗したり、といった危険を伴うものである。また、ブランコ、ジャングルグローブ、回旋塔など、大きな動きを伴う遊具において、周囲の子どもとの接触の危険性が指摘されている。Table 3 には、このような遊びにおける事例のみられた学年を示した。ここから、多くの事例が年中児及び年長児において観察されており、年齢が上がり、身体を大きく使った活動が活発になるほど、危ないと思われる遊びも増加することが伺われる。

Table 2 遊具の使い方で危なかったことや、予想とは異なる遊具の使い方をしてしたこと

遊具	遊び方
ジャングルジム	上から飛び降りる／上に登って木の葉を取る／縄跳びを結んで回す／手を使わないで登る
雲梯	下に人が通り足がぶつかる／支柱を鉄棒のようにする／足をひっかけてぶら下がる／上を歩く／上ででんぐり返し／上から飛び降りる
車の遊具	四つん這いに乗って走らせる
三輪車	スピードを上げて急に曲がる
シーソー	大勢で乗る
滑り台	頭から滑る／下から上へ上る／上と下でボールを転がしたり、投げたりする／支柱で上に上る
タイヤ	上に乗って歩く／トランポリンのようにしてはねる
鉄棒	片手でぶら下がる／手を離す／鉄棒をしている子の近くに寄る
登り棒	上にぶら下がって飛び降りる／タイヤををトランポリンにして反動で登る
ブランコ	乗っていたブランコに近づいてぶつかる／ロープをねじって乗る／立ちこぎ／支柱により登り、飛び降りる
ジャングルグローブ	きちんと乗っていない子がいるのに回しだす
回旋塔	横に大きく揺らす。まわりの子どもにぶつかりそうになる
大型積み木	積み上げて、上から飛び降りる
階段	手すりに上る／上の段から飛び降りる

Table 3 危ない、予想とは異なる遊具の使い方がみられた学年

質問項目	(括弧内は回答者数(65名)に対する割合(%))			
	年長	年中	年少	乳児
遊具の使い方で危ないと思ったこと	33 (50.8)	28 (43.1)	9 (13.8)	2 (3.1)
予想とは異なる遊具の使い方をして いた	25 (38.5)	29 (44.6)	11 (16.9)	4 (6.2)

#### IV. 調査2：子どもの遊びの安全性に対する保護者と大学生との認識の差異

次に、保護者および大学生が実際に子どもと関わるイベントを事例として、子どもの遊びなどにおける実際の行動に焦点を当てて観察および質問紙調査を行い、子どもの遊びにおける行動の実態と安全性と、保護者と保育・教育職を目指している学生との子どもの遊びの安全性に関する認識について検討を行なった。

##### 1. 質問紙調査の概要

###### 1) 調査対象者

質問紙調査は平成20年10月に開催された鎌倉市と鎌倉女子大学との共催による子育て支援イベントである「第3回かまくらママ&パパ'sカレッジ」において実施した。対象者は同イベントに参加した子ども（0-10歳）の保護者（有効回答数40名：母親30名，父親10名）およびボランティアとしてイベント内の運動遊び（跳び箱，マット，ボール等を使った自由遊び）に参加した女子大学生（児童学部1，2年生40名，以下大学生）である。大学生は自主的にイベントへの参加を希望した学生であり，そのほとんどが将来の進路として保育職あるいは教職を希望している。

## 2) 質問項目

質問紙調査の冒頭において，調査対象者の基本属性として，保護者に対しては年齢，性別，子どもとの続柄，子どもの年齢，性別を，大学生に対しては学科と学年を質問した。その後，子どもの遊びの安全面に関して，「予想と異なる遊具の使い方（設問1）」「遊具の使い方で危ないと思ったこと（設問2）」「子どもの遊びにおける危険な行動に対する認識（設問3）」「子どもの遊びの安全性に対する認識（設問4）」の4つの設問について回答を求めた。質問項目の詳細については，以下の結果と考察において述べる。

## 2. 結果と考察

### 1) 設問1. 予想と異なる遊具の使い方

設問1では，調査を実施したイベントにおいて，「遊具を使った子どもの遊びの中で，予想とは異なる遊具の使い方をしていたことについてお書きください」と質問し，自由記述による回答を求めた。保護者と大学生との回答には大きな質的差異はみられず「フラフープをトンネルとして使う」「跳び箱の上にまたがる」「縄跳びを綱引きのように引っ張りあう」等の意見がみられた。また，回答の中には，通常の遊具の使い方が一段落すると徐々に予想とは異なる仕様に变化していくという意見もみられた。

### 2) 設問2. 遊具の使い方で危ないと思ったこと

設問2では，調査を実施したイベントにおいて，「遊具の使い方で危ないと思ったこと（実際に怪我をしなくても）がありましたら，お書きください」と質問し，自由記述による回答を求めた。保護者の回答としては「年上の小学生と幼児をいっしょにするのはあぶない」「大勢の子供たちの中でスペースが限られている」等，遊びの空間の問題を指摘する意見が散見されたが，回答のない保護者も多く，対象としたイベントにおいては遊具の危険性はあまり認識されていないことが伺われた。なお，事例としたイベントは安全に配慮した環境で実施されており，実際には事故は発生していないため，保護者が危険を認識する頻度が少なかった可能性も考えられる。一方，イベントの中で実際に子どもの援助に携わった大学生の回答としては，「バットを振り回す」「ボールを人に向かって投げたりする」「バットで他の子どもをたたこうとする」といった遊具の乱暴な使用，「フラフープ遊びで周りをあまり気にしなかったので，他の子に当たりそうになった」「バットをふる時，まわりに人がいて危ない」といった周囲への不注意，「縄跳びをくぐる時に首や顔にひっかかりそうだった」「小さい子どもが大きいボールを使って遊ぶと体全体がボールの上のってしまい危ない」など遊具の使用における危険性等が挙げられた。

また，行動観察の結果，上記のアンケートの回答のような行動が認められたものをFigure 1とFigure 2に示す。





Figure 1 バットを人の近くで振る

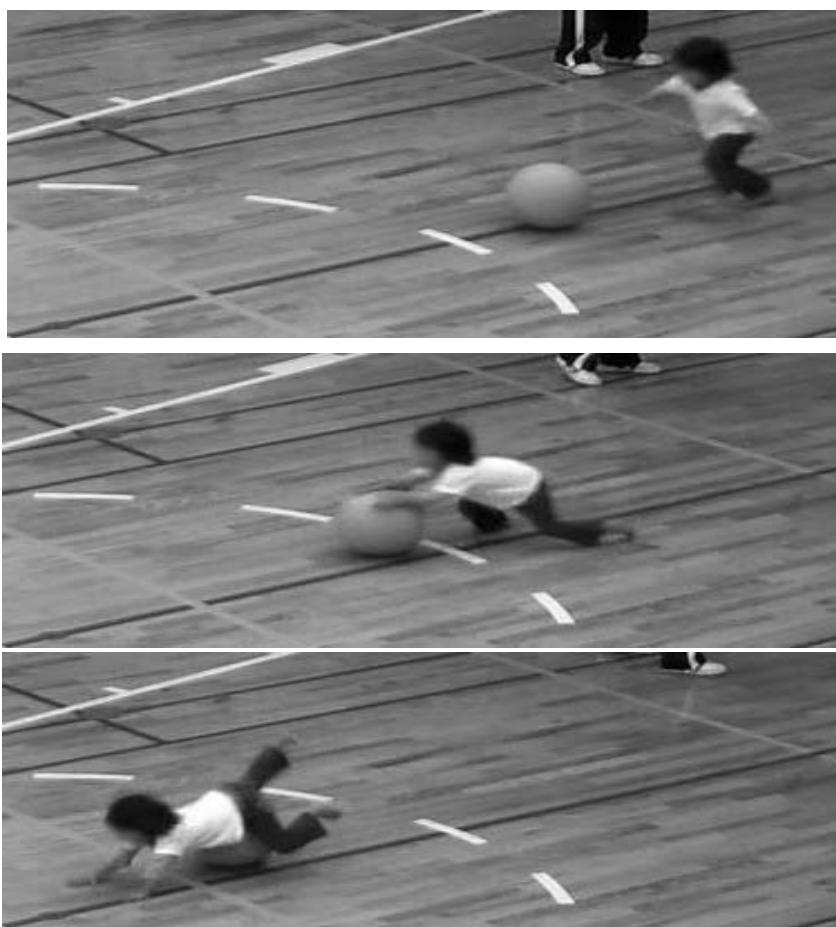


Figure 2 ボールを拾うため追いかけてボールの上に乗る転倒

### 3) 設問3. 子どもの遊びにおける危険な行動に対する認識

設問3では、日常の子どもの遊びにおける危険な行動に対する認識について、Table 1に示す質問項目を設け、各項目について、「よくある(4) —全くない(1)」の4件法で回答を求め、得点化した。この得点について主因子法、プロマクス回転解法による因子分析を行い、固有値1以上で因子を抽出した結果、Table 4に示す4因子が得られ、各因子に対して負荷量0.4以上の項目を因子項目とした。それぞれの因子に含まれる因子項目の特徴から、因子1を「他児との接触」、因子2を「高所での遊び」、因子3を「通常とは異なる、無理な遊び方」、因子4を「不安定な場所での危険な遊び方」と命名した。また、因子項目の得点の平均値を因子得点とした。

子どもの遊びにおける危険な行動に対する認識についての各質問項目について、保護者および大学生の得点の平均値をTable 4に示す。質問項目ごとにt検定により両者の平均値を比較した結果、因子1「他児との接触」に含まれる「遊具の中で他の子どもを押してしまう」「遊具の中で他の子どもにぶつかる」および因子4「不安定な場所での危険な遊び方」に含まれる「遊具の定員をオーバーして使っている」においては大学生の得点が高く、大学生は保護者よりも高い頻度で生じると認識していることが考えられる。他方、因子4に含まれる「大型積み木や机などを積み重ねて上にのぼる」については保護者の得点が高く、保護者は大学生よりも高い頻度で生じると認識していることが考えられる。因子得点についても同様に保護者と大学生とを比較した結果、因子1「他児との接触」においてのみ有意な差がみられ、保護者よりも大学生の得点が高かった(Figure 3)。

保護者よりも大学生の得点が高かった項目はいずれも遊びにおける子ども同士の関わりの中で生じる行動である。このことについて、保護者は子どもがひとりで遊ぶ姿に接することが多く、また行動に対する認識も集団ではなく子どもの個人についてのものであると考えられる。他方、大学生は実習をはじめとする保育や子どもの遊びに関わる経験の多くが集団を対象にしたものであるため、保護者以上に子ども同士の関わりの中で生じる行動に対する認識が高かったと考えることができよう。

Table 4 設問3「子どもの遊びにおける危険な行動に対する認識」の各質問における保護者と大学生の得点の比較

	保護者		大学生		<i>t</i>	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		
因子1：他児との接触						
遊具の中で他の子どもを押してしまう	2.32	(0.97)	3.03	(0.70)	3.56	***
遊具の中で他の子どもにぶつかる	2.59	(0.83)	3.41	(0.60)	4.81	***
因子2：高所での遊び						
自分の身長よりも高いところから飛び降りる	2.35	(1.18)	2.49	(0.90)	0.55	
自分の身長よりも高いところに登る	2.92	(1.01)	2.73	(1.07)	0.78	
因子3：通常とは異なる、無理な遊び方						
正しい使い方を理解せずに遊具で遊ぶ	2.76	(0.86)	2.86	(0.93)	0.50	
自分の年齢よりも高い学年用の遊具で遊ぶ	2.97	(0.70)	2.75	(0.81)	1.25	
通常とは異なる遊具の使い方をする	3.05	(0.66)	2.97	(0.55)	0.57	
遊具に力を加えすぎる	2.54	(0.84)	2.69	(0.67)	0.87	
因子4：不安定な場所での危険な遊び方						
大型積み木や机などを積み重ねて上にのぼる	2.58	(0.94)	2.14	(0.90)	2.05	*
ボールやタイヤなどの上に乗る	2.78	(1.00)	2.95	(0.91)	0.73	
自分の年齢よりも低い学年用の遊具で遊ぶ	2.92	(0.80)	2.83	(0.81)	0.46	
遊具の定員をオーバーして使っている	2.17	(0.79)	2.58	(0.77)	2.23	*

\*\*\* p < .001, \* p < .05

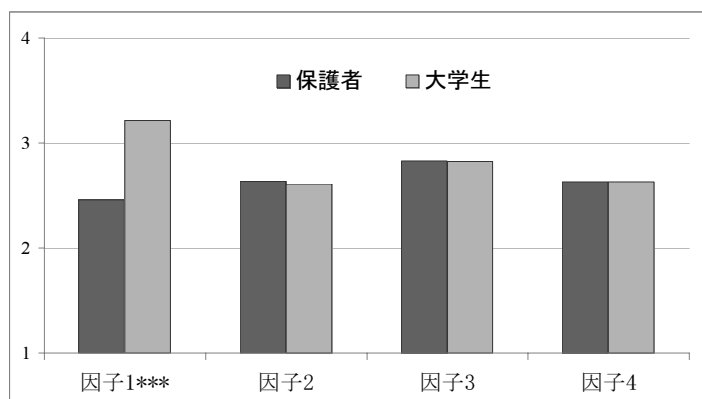


Figure 3 設問3「子どもの遊びにおける危険な行動に対する認識」における保護者と大学生の因子得点の比較

\*\*\*  $p < .001$

#### 4) 設問 4.子どもの遊びの安全性に対する認識

設問 4 では、日常の子どもの遊びの安全性についてどのように捉えているかについて質問した。Table 5 に示すように、質問紙には対立する 2 つの意見 (A と B) を提示し、各項目について、「とても A にあてはまる (5)、やや A にあてはまる (4)、A、B どちらともいえない (3)、やや B にあてはまる (2)、とても B にあてはまる (1)」の 5 件法で回答を求め、得点化した。因子分析の結果 (因子分析および因子得点の算出については設問 3 と同様の方法を用いた)、Table 5 に示す 4 因子が得られ、それぞれの因子に含まれる因子項目の特徴から、因子 1 を [子どもの安全な遊びのための大人の介入]、因子 2 を [スリルのある遊びに対する許容]、因子 3 を [安全のための遊びの制限]、因子 4 を [危険な遊びに対する不安] と命名した。また、因子項目の得点の平均値を因子得点とした。

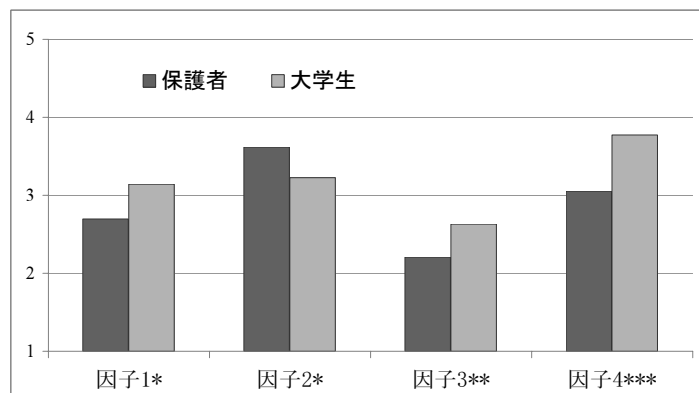
子どもの遊びの安全性に対する認識の各質問項目について、保護者および大学生の得点の平均値と質問項目ごとに t 検定により両者を比較した結果を Table 5 に示す。因子得点についても同様に保護者と大学生とを比較した結果、因子 1 [子どもの安全な遊びのための大人の介入]、因子 3 [安全のための遊びの制限]、因子 4 [危険な遊びに対する不安] および因子に含まれなかった項目「安全のため、子どもの遊びは出来るだけ大人が見ておくべきだと思う」においては大学生の得点が高く、大学生は保護者よりも高い認識を持っていると考えられる。他方、因子 2 [スリルのある遊びに対する許容] および因子に含まれなかった項目「遊具やおもちゃの安全な使い方について、日頃から子どもと話している」については保護者の得点が高かった。これらの結果から、保護者は大学生に比して子どもの遊びに許容的な傾向にあり、遊びの安全性よりも子どもの遊びに自由さや自主性を求める傾向にあることが考えられる。これに対して大学生は保護者よりも子どもの遊びの安全に対する不安が高く、遊びの安全のために子どもの遊びに介入したり、遊びを制限したりすべきであると考えていることが伺われる。



Table 5 設問4「子どもの遊びの安全性に対する認識」の各質問における保護者と大学生の得点の比較

	質問項目	保護者		大学生		t
		M	SD	M	SD	
因子1：子どもの安全な遊びのための大人の介入						
A	子どもに遊具やおもちゃの使い方を制限することがある	2.84	(1.26)	3.03	(0.95)	0.73
B	遊具やおもちゃの使い方は大人が制限せず、原則は子どもの自主性に任せている					
A	子どもにおもちゃを与えるときは、安全を第一に考える	2.86	(1.27)	3.58	(1.28)	2.44 *
B	おもちゃは、子どもの興味を第一に考える					
A	子どもがおもちゃや遊具の使い方ですぐ戸惑っていたら、すぐに手伝う	2.38	(1.21)	2.83	(1.11)	1.69 +
B	子どもがおもちゃや遊具の使い方ですぐ戸惑っていても、すぐには手伝わず、まず見守る					
因子2：スリルのある遊びに対する許容						
A	スリルある遊びも、ある程度経験させた方が良いと思う	3.84	(1.01)	3.50	(0.88)	1.57
B	スリルのある遊びはけがにつながるからのでさせたくない					
A	遊具は多少スリルがあった方が良いと思う	3.41	(1.01)	2.95	(0.81)	2.16 *
B	遊具は、安全であれば、スリルはなくても良いと思う					
因子3：安全のための遊びの制限						
A	おもちゃや遊具は決められた使い方以外の遊びをさせたくない	1.86	(0.95)	2.20	(1.11)	1.42
B	おもちゃや遊具は子どもの発想で色々な遊び方をして良いと思う					
A	年齢にあったおもちゃや遊具で遊ぶ方が良いと思う	3.03	(0.99)	3.63	(0.90)	2.79 **
B	年齢よりも少し高いレベルのおもちゃや遊具で遊ぶ方が良いと思う					
A	遊びの中では少々のけがははやむを得ないと思う（逆転項目）	4.27	(0.65)	3.92	(0.90)	1.92 +
B	少しでもけがをしそうな遊びはさせたくない					
因子4：危険な遊びに対する不安						
A	普段の子どもの遊びで、危ないと感じることが多い	3.16	(1.07)	3.83	(0.68)	3.23 **
B	普段の子どもの遊び危ないと感じることは少ない					
A	日頃から、子どもが危ない遊び方をしないかと不安になることが多い	2.95	(1.08)	3.73	(0.64)	3.82 ***
B	日頃、子どもが危ない遊び方をしないかと不安になることは少ない					
(因子に含まれない項目)						
A	安全のため、子どもの遊びは出来るだけ大人が見ておくべきだと思う	3.51	(1.33)	4.20	(0.72)	2.79 **
B	危険がない限り、大人は子どもの遊びを監視しない方が良いと思う					
A	子どもがおもちゃや遊具で危なそうな行動をしたら、すぐ止めに入る	3.54	(1.22)	3.93	(1.10)	1.46
B	子どもがおもちゃや遊具で危なそうな行動をしても、自分で解決するようすぐ止め見守る					
A	遊具やおもちゃの安全な使い方について、日頃から子どもと話している	3.14	(1.17)	2.73	(0.80)	1.73 +
B	遊具やおもちゃの安全な使い方について、子どもと話すことはない					
*** p<.001, ** p<.01, * p<.05, + p<.10						

\*\*\* p&lt;.001, \*\* p&lt;.01, \* p&lt;.05, + p&lt;.10



**Figure 4** 設問4「子どもの遊びの安全性に対する認識」における保護者と大学生の因子得点の比較

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

## V. まとめ

危険な子どもの行動に対する認識に関して、実習生を対象に実施した調査1の結果から、大人の予期せぬ利用方法での遊び、活動場所として高所もしくは不安定な場所、そして多くの活動量によって危険と感ずる割合が高くなる傾向にあることが示唆された。このうち、「大人の予期せぬ子どもの利用方法での遊び」について、調査2のように実際に子どもの遊びが行なわれているイベントで調査した結果、子どもの保護者と、保育・教育を専門に学習している大学生との間に認識の差異はみられず、むしろ保護者、学生を含めた大人と子どもとの認識の違いのほうが大きい可能性が考えられる。しかし、質問紙の回答にみられたように「(子どもは)通常の遊具の使い方が一段落すると徐々に予想とは異なる仕様に変化していく」を、予期せぬ遊びを通常の遊びからの発展系であると解釈するならば、保護者や学生は子ども個々の行動や遊びに対する観察をより深めていくことで子どもの行動、そして安全性について理解を深めることができると考えられる。

また、調査2では、子どもの遊びの安全性に対する認識について、おもに保護者と大学生との差異を中心に検討した。その結果、保護者は子どもの遊びに対して、遊びの集団性よりも子ども個人の活動に注目しがちであり、安全性よりもリスクを通した経験や子どもの自主性を重んじる傾向にあることが伺われた。他方、大学生においては遊びにおける子どもの集団性に注目するとともに、子どもの遊びの安全性を重視し、遊びの安全のためには大人の援助や制限が必要であると考えていることが示唆された。今回の調査の対象とした大学生はイベントで子どもの遊具を使った遊びに関わった学生であるため、比較的遊びの安全性に対する認識が強かったと考えられる。また日常から子どもに接している保護者は子どもの行動に対して多く経験している分、意外さを感じることは少なかったと考えることができる。学生の安全性の重視に関しては、今後の学習や子どもと関わる経験により変化することも想像できるが、子どもの活動を個もしくは集団で認識するかの相違は、保護者と保育者・教師との間にも生じることが考えられ、今後、保護者と保育者および大学生との視点やその違いを両者に提示することで、子どもの遊びの安全性に対する視点の啓蒙につなげることができると考えられる。

## VI. 参考文献

- 家田重晴, 阿部明浩, 松岡 弘, 松村みち子, 渡邊正樹: 子どもの事故及び「ひやりはっと」体験に関する調査, 児童研究, (2008), 87, 53-65
- 内田伸子: 幼児の安全教育に関する総合的研究 ―幼児の危険認識の発達に及ぼす社会・文化的要因の影響―, 財団法人セコム科学技術振興財団研究助成平成17年度研究成果報告書 (2006)
- 荻須隆雄: 都市公園・児童遊園等における遊具による子どもの事故防止のための安全システム構築に関する研究 ―母親クラブと地方自治体との協働例を中心として―, 児童研究, (2004), 83, 3-19
- 荻須隆雄, 福田武比古ら: 保育所における事故防止・安全保育 ―特別保育実践講座―, 社会福祉法人日本保育協会 (2003)
- 荻須隆雄, 齋藤歎能: 子どもの事故と安全教育 ―生活のなかに潜む危険―, 玉川大学出版部 (1997)
- (社) 土木学会巨大地震災害への対応検討特別委員会: 地震なんかに負けない! 幼稚園・保育園・家庭防災ハンドブック, 学習研究社 (2006)
- 鈴木和弘: 学校敷地内における子どもの事故防止について, 健康教室, (2006), 9, 8-13
- 野間口英敏: 運動部の事故防止について, 健康教室, (2006), 9, 14-17
- 森 健, 岩崎大輔, 子川 智: 子どもの安全ハンドブック, 山と溪谷社 (2006)
- 山地啓司編著: 子どものこころとからだを強くする, 市村出版 (2005)